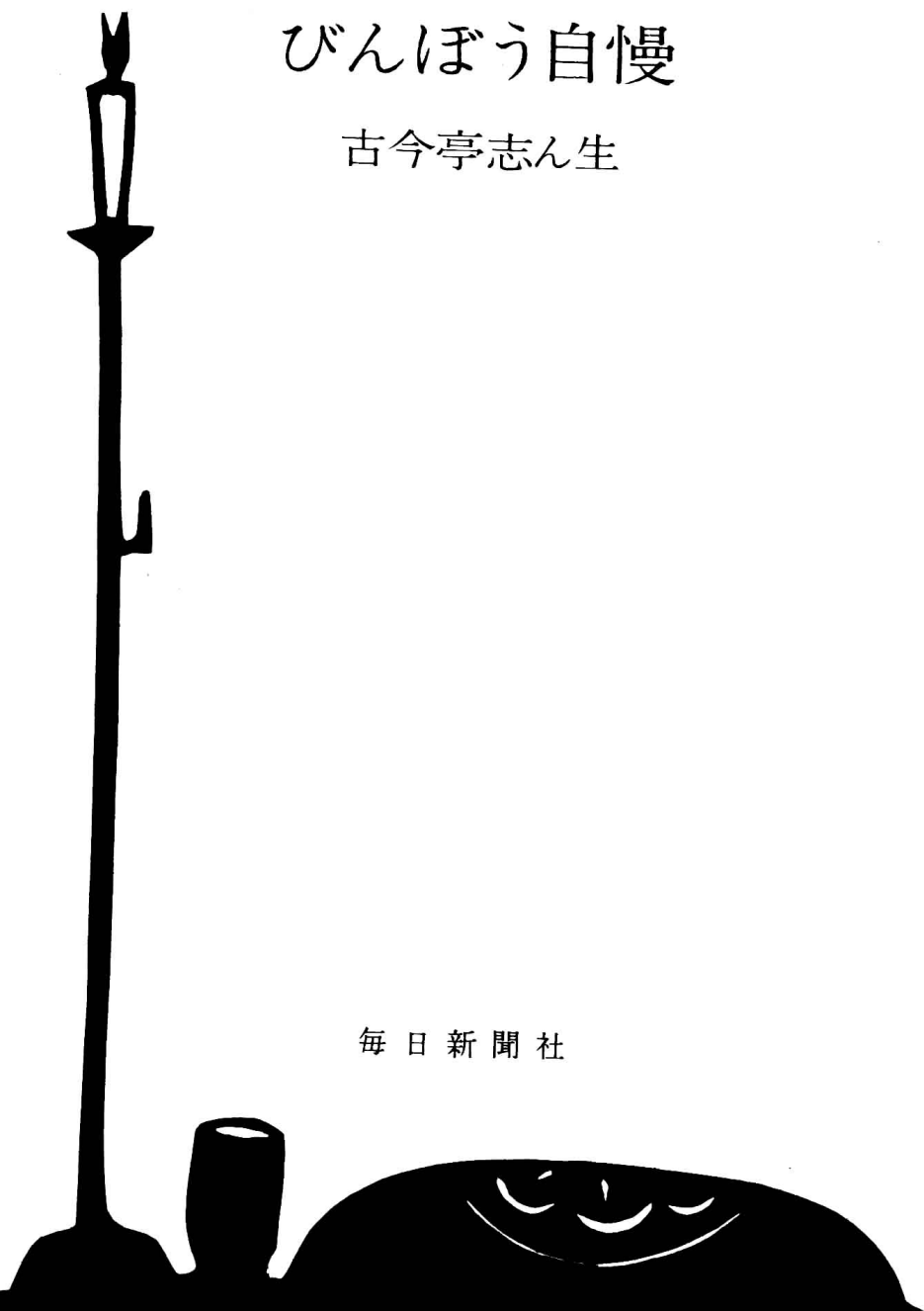


びんぼう自慢
古今亭志ん生

びんぼう自慢

古今亭志ん生

毎日新聞社



びんぼう自慢

定価 四二〇円

昭和三十九年四月一日印刷
昭和三十九年四月五日発行

著者 古今亭志ん生

発行者 高木金之助

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一の一

大阪市北区堂島上二の三六

北九州市門司区清滝町一の九〇二

名古屋市中村区堀内町四の一

印刷 中央精版印刷

製本 大口製本所

〈検印廃止〉



著者近影

びんぼう自慢

目次

明治愚連隊

たいへんな生いたち

おそるべき少年時代

見習から前座へ

一にも二にも修業

はなし家の世界

落語 火焰大鼓

青春旅日記

にわか「二ツ目」

旅は憂いものつらいもの

悲喜こもごも

九

一六

二三

二九

三五

四二

六二

六九

七五

小金井芦洲のこと

八一

小金井芦風とは

八七

はれられたと思つたら

九三

落語 茶汲み

九七

びんぼう自慢

女房を迎えて

一〇七

震災前後

一一二

今に見ていろ、オレだって

一二三

なめくじ長屋

一二九

永住町から神明町へ

一三七

落語 三軒長屋

一四四

賽と猪口

ばくちの味

一六八

酒はよ、かも

一七五

身につかぬぜニ

一八二

五代目志ん生をつぐ

一八八

はなし家の苦肉策

一九四

酒につかれて

二〇〇

落語 疝氣の虫

二〇六

生きる

満州へ慰問行脚

二一六

敵兵のなかで 二三

満州から日本へ 二三

二人のせがれ 二五

楽屋帖 小島貞二 二四二

――あとがきにかえて

装本（紙切り） 林家 正楽

びんぼう自慢

明治愚連隊ぐれんたい

たいへんな生い立ちお

ウソは大きらい ええ、昔から、貧乏をあつかった小ばなしはたくさんあります。

この上もない貧乏人のところへ、盗ぬすッ人がはいって、そこいらを捜したが、何もありません。亭主はてえと、せんべい布団ぶだんをひっかぶって知らん顔をしている。「ええ、いまいましいな。こんなに何も無い家ははじめてだ」と小言こごをいう。亭主がおかしいので、クスツと笑うてえと、盗ッ人が、「やい、やい、笑いごとじゃアねえよ」

また、そうかと思うと、金をひろってうれしかったという話をきいた吝しわしい人が、「そんなにうれしいものなら、よし、オレもひとつひろってみよう」てんで小判こばんを持って来ましてな、タタミの上にはうり出してはひろってみるが、別にうれしくも何ともありません。「ちえツ、こんなものがなんでうれしんだい、ばかばかしい」てんで、放りなげしているうちに、コロコロところがって、どっかへ行ってしまった。さア、困まどって、あっちこっち血眼ちまなこになって捜して、やっと見つけて、「あア、あったあった。なるほど、こいつア、たしかにうれしい」

また、そうかと思うと、用があつて表へ出かけると、向こうから心安い友達ともだちが来るので、ボンと一



つ背中アたたいて、「よう、貧乏神、どこへゆく」と声をかけると、「うん、今からお前ンちへ行くところだ」とゆきすぎる。ええ、いまましい野郎だなア、とブツブツ言いながら用事イすまして帰りに、またさっきの友達が来たので、こんどは背中をなぜながら、「おや、福の神、これからどこへお出かけで」ときくてえと「おオ、いま、お前ンちから出て来たところよ」

いろいろとあるものであります。

こんな具合で、貧乏人というものには、どこまでも貧乏がついて回るようにできているのであります。只今から「貧乏自慢」てえことにつきまして、いろいろとあたしの自伝みていなことを申し上げるわけであります。出てくる話はつてえと、どうもこの小ばなしの親戚のような面目ない話ばかりでありまして、あんまり学校で教えてくれるような立派な話は出て参りません。

あたしは、昔からこの年になるまで、ウソをいうことが大きらいで、未だにウソと坊主の頭だけはゆったことがあります。これからいろいろと申しあげることにつきて、

「どうせ、落語家のいうことだアな、おもしろいことをいって人を笑わせるのが商売だから、半分は与太だろう」

なんてえことをおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが、恥は恥、失敗は失敗で、素のまんま申しあげるわけで、正真正銘かけ値なし……どうぞ、そのおつもりでおつき合いを願っておきます。

本名は美濃部孝蔵 あたしだって、いきなり大人になったわけではありません。やっぱり親もあれば先祖もある。「おや、ちよいと、この坊や、可愛いじゃアないの」なんてなことを言われた子供

のころだってあったんですよ。

あたしの本名はてえと美濃部孝蔵^{こうぞう}でんで、明治二十三年六月五日の生まれであります。教育勅語が降下になった年と同じです。

親とすれば、これでも「大いに親孝行をして、蔵^{くら}の一つも建てておくれよ」というような希望をもつて、つけてくれた名前だそうですが、どうもこと志^{こころざし}しと違うのが世の常でありまして、あたしの場合なんぞ、ガキの時分から手のつけられない親不孝もんで、道楽ウさんざしたあげく、勘当同様に家イとび出したつきり、とうとう二タ親の死に目にもあえなかったんですから、親の思惑^{おもわく}とはまるであべこべになっちまって、実にどうも、申しわけないったらありやしません。

そのかわりといっちゃアなんですが、いま、あたしのところは子供が四人いて、せがれと娘と半々ですが、みんな立派に成人をして、息子たちはあたしと同じ商売にはいって、いろいろと親孝行してくれております。あたしが、親父^{おやじ}につくせなかったことを、あたしの子供たちがあたしにしてくれているんですから、全くありがたいわけのものであります。

三千石の知行取り あたしんとは、おやじの代まではさむらいだったもんだから、昔の戸籍にやア、士族なんて書いたものです。

さむらいだったってヘッポコじゃアなくって、徳川直参^{じきさん}で三千石の知行^{ちぎょう}を取ってたんですよ。祖父^{じい}さんの美濃部重行^{しげゆき}てえひとは、槍^やの指南番をしていたくらいだから、小石川の水道町……いまの水道橋のあるあたりですが、あそこにとはうもない大きな屋敷^{やしき}があって、そこに住んでいた。

あたしがガキのころ、よくおやじから、「この辺がそうだったんだよ。ズーッと向こうのほうまで

なア……」なんてえことをきかされたものであります。

おやじの名前はてえと盛行で、お袋のほうがてう（ちようと読む）というんですが、このおやじてえひとが大変な道楽ものでして、三千石の若様だから、何一つ不自由なんぞないはずなのに、どういふもんだか家にジツとしていない。表エ出て、着物や大小なんぞどっかへあずけて、頭髮アなおして町人の風をして、そいでもって吉原へ行ったり、寄席へ出入りして遊んでばかりいる。

「金ちゃん」てえ友達がいて、これがやつぱり同じ水道町の紺屋のせがれで、のちに「ステテコの円遊」で鳴らした三遊亭円遊なんです。本名が竹内金太郎だから「金ちゃん」というんだが、芸事が好きで、新宿のたいこ持ちからはなし家になったそんな時分だから、うちの親父としじゅう遊んであるいてばかりいる。

祖父さんにとっては、不肖の息子だったんでしよう。

でも、旗本の働きどころは、例の御一新前のゴタゴタで、上野の戦争のときなんぞ、槍を持って大層働いたなんてえ話を、よく自慢がてらきかせてくれたものであります。

慶応が明治になる。廃刀令が出る。斬髪令が出る。世はまさに文明開化となる……なんてえことになりまして、さア、おさむらいなんてえものは、陸に上がった河童みてえなもので、さっぱり役に立ちません。

土地だの屋敷だのなんてえものは、そっくりお上に取りあげられてしまったが、その時分の政府は、取りあげてばかりじゃアなんだろうからで、徳川直参のものにだけ、いくらかずつ、分に応じたゼニくれたんだそうです。あたしんとこへは八百両くれた。ものの安い時分の八百両てえか

ら、そりゃア大層な値打ちですよ。

これを元手に、なんか商売でも始めりゃいいのに、おやじの考えてえのはわからないもので、土地イ買つて家を建てた。その土地でえのが、本郷の切通しの、岩崎さんの邸の向かい側のところで、家はなに様のお邸だろうというような、とほうもないものをおつ建てたから、それだけで四百両かかったそうです。

それで商売は何をしていたかってえと、警視庁の「棒」なんです。棒てえのは早く言えばお巡りさんのことで、巡査がサーベルなんぞをガチャガチャ鳴らすようになったのは、ズーツとあとのことで、おやじの時は長い棒を持って、「おい、こらッ！」やなんか言つて、そこいらを歩いていたのであります。世間の人は、みんな「棒」とよんでいた。

そんな棒をつとめて、わずかばかりの月給もらつてる人間に、大邸宅なんぞ必要ないでしょう。「べらぼう」てえのは、こういうことなんですよ。

十歳でバクチを打つ 間もなく、そこを売つて、いまの五軒町を右へはいった亀住町の裏長屋へ引越したんですからくだらない。あたしは、そこで生まれたんです。

あたしの兄弟はてえと、まん中に女アはさんで男四人の五人兄弟。あたしはその末っ子に当たります。ところが、みんな三十の声もきかないうちに早死にしまつて、あたしひとりが残っちゃった。短命の血統かと思うとそうじゃアない、祖父さんの連れ合いだったお祖母さんてえひとは、九十まで生きていて、なんでも田安家と親戚関係だったそうで、きれいで上品で、裏長屋に置いとくなんざもつたないほどの婆さんでしたよ。